

土器を埋納する柱穴について

—古墳時代を中心にして—

小池 寛

1. はじめに

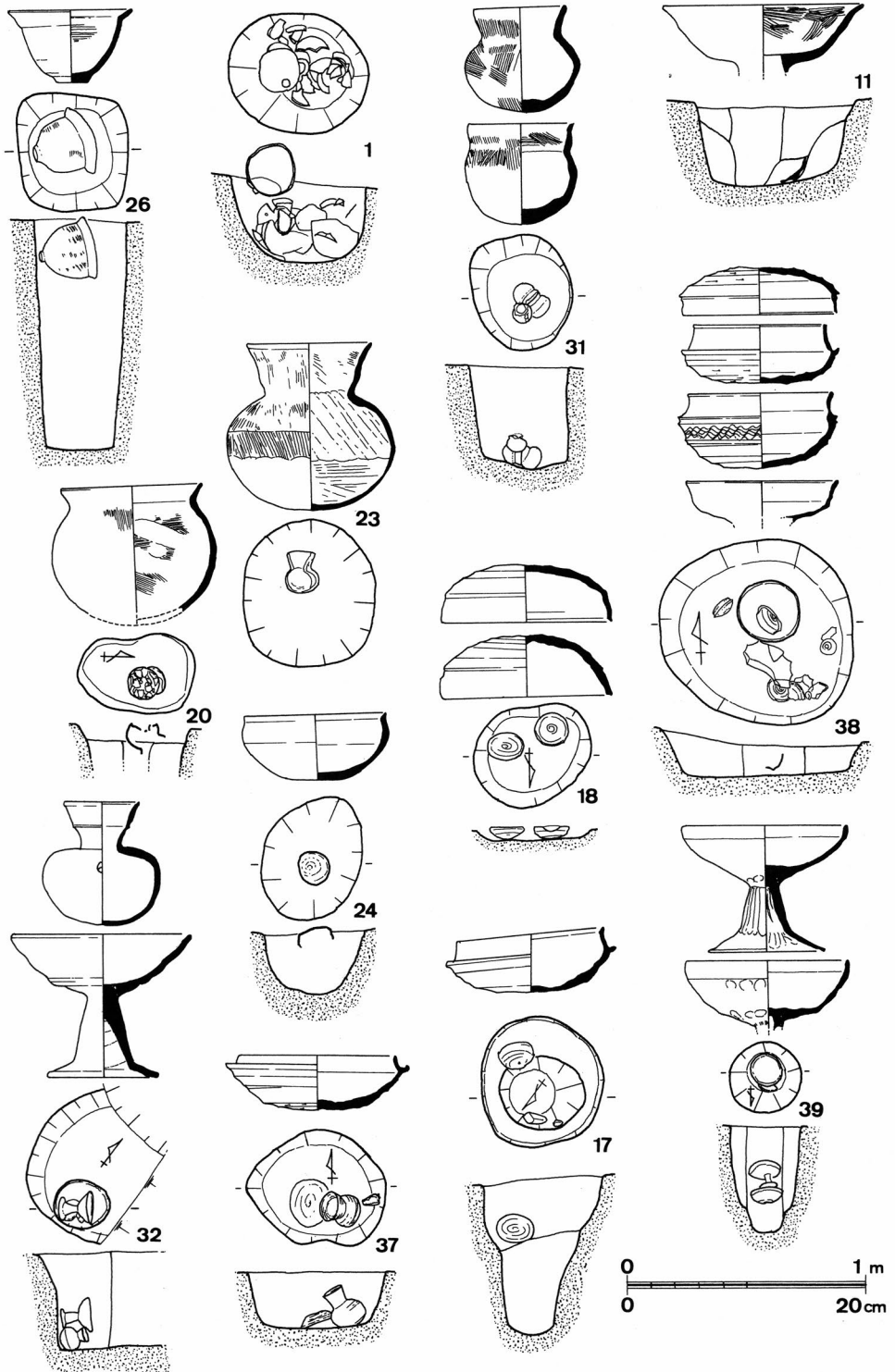
律令期の掘立柱建物跡を構成する柱穴から、八稜鏡や土器などが出土する事例は、広く知られている。その解釈としては、地鎮に係わる宗教性を想定する場合が多く、調査件数の増加により、類型化も進展している。これらの埋納行為は、地鎮との関連において解釈できることから、柱穴内埋納が律令期以降に盛行するかのような印象がある。しかし、古墳時代の集落においても、柱穴内から完形の状態を保った土器が出土する事例が報告されている。背景に存在すると思しき宗教的理念については、具体的な文献に依拠した検討ができないため判然としないが、出土状況の特異性から漠然と宗教性を指摘する報告が多い。

本稿では、既刊の報告書から土器を埋納した柱穴を抽出し、時期、埋納行為の時間的経緯、出土土器の器種・器形などの基本的事項について一覧表を作成し、現時点での傾向と問題点を把握したい。

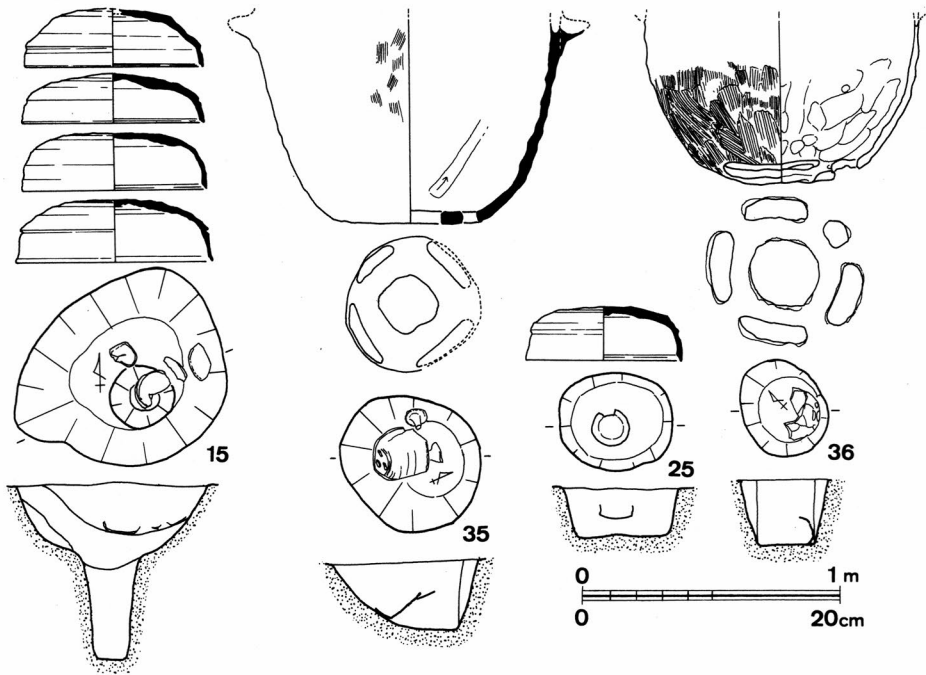
2. 土器を埋納する柱穴の概観

今回の集成作業にあたり兵庫県・大阪府・奈良県・京都府・滋賀県・和歌山県の既報告書を通観し、土器を埋納した柱穴を集成した。しかし、当初の見通しとは異なり、関連遺構の事例は僅かであり、時期、埋納行為の時間的経緯、出土土器などを基軸とした属性による類型化はなし得なかった。ここでは、抽出した代表関連遺構をおおむね時代順に概観し、全体的な傾向を把握したい。

集落内において土器を埋納する土坑の事例としては、大阪市山之内遺跡YM83-19次の畿内第I様式新段階に比定できるSP05(NO. 22)などがある。完形の小型鉢や甕の出土状況から土器埋納遺構として報告されている。その解釈が正当であるか否かの判断は難しいが、その出土状況から何らかの埋納にかかわる意図を看取できる。これら埋納土坑が生成された理念と柱穴埋納の理念の検討は、単に、埋納遺構のみを対象にした検討では不十分であり、集落全体の中での位置付けや東アジアを視野に入れた比較検討が必要である。また、神戸市玉津田中(NO. 1)では、高杯や壺の完形品を複数個体埋納した土坑が検出されている。完形個体の



第1図 関連遺構(付番は一覧表に一致、加筆トレース)



第2図 関連遺構(付番は一覧表に一致、加筆トレース)

高杯や甕などは、庄内から布留式土器の特徴を有しているが、当該遺構についても柱穴埋納と同一の理念を背景にしているか否かについての検討が必要である。なお、現時点では、以上のように土坑や溝に完形土器を埋納する事例は確認できているが、弥生時代前期に遡る柱穴内の埋納は確認していない。

一方、古墳時代前期にあつて、桜井市谷遺跡5次では、柱穴P78(N0.26)の上部から鉢が倒置された状態で出土している。土器の出土レベルから柱材の抜き取り後に埋納されたと考えられる。当該柱穴が、掘立柱建物を構成する柱穴としては認識されていない問題点もあるが、柱穴内埋納の一例として認識できる。また、古墳時代前期から中期前半に比定できる木津町上人ヶ平遺跡では、柱痕の最下部に土師器の小型壺を合わせ口にした状態で埋納している柱穴四ハ(N0.31)が確認されている。掘立柱建物跡106を構成する柱穴であり、柱穴の中央底部で完形の状態を保っていることから、柱材の抜き取り後に埋納されたと解釈できる。以上のように、僅かの事例ではあるが、古墳時代前期には土器を柱穴に埋納する行為が、既に成立していることが把握できた。今後の類例の増加により、その分布などの詳細が把握できるであろう。

次に、須恵器出現以後を中心とした古墳時代中期から後期の事例について概観したい。現時点で陶邑編年TK216～TK47型式に比定できる事例が16例、同MT15～TK209型式の事例

が11例であり、特にTK47～MT15型式の事例は5例である。いずれにしても前代に比して類例が増加していることが、僅かな資料数ではあるが把握できる。

陶器編年TK216～TK47型式に比定できる事例の典型例として、精華町森垣外遺跡第2次検出のSP653(NO. 32)がある。柱痕底部に須恵器の甕を倒置し、その直上に土師器の高杯を同じように倒置している。土師器高杯及び須恵器甕は、一般的な居住空間からも出土するが、いわゆる祭祀遺構や埋葬関連遺構からの出土も顕著である。当該資料にも非日常的な要素を見出すことができる。また、同遺跡第3次では、柱痕の中間部分から脚部を打ち欠いた土師器高杯と、その直上に完形の土師器高杯を正置に埋納したSP188(NO. 39)を検出した。当該資料も柱穴内埋納の典型例として把握でき、土師器高杯の脚部を故意に打ち欠くなどの特徴は、注視すべきである。

なお、同遺跡第3次検出のSP828(NO. 35)では、柱材の抜き取り跡から土師器の甕下半部と高杯脚部が出土し、SP939(NO. 36)では、同じく柱材の抜き取り坑から土師器の甕下半部が出土している。完形品ではないことから柱穴埋め戻し時に混入した可能性もあるが、いずれも甕の下半部であり、また、SP828では土師器高杯の脚部が相伴していることから、意図的な埋納として認識しておきたい。

神戸市神楽遺跡(NO. 6～9)では、柱穴内から製塩土器が出土しており、大阪市長原遺跡(NO. 21)では馬歯、神戸市生田遺跡(NO. 4)では滑石製紡錘車・有孔円板・白玉が出土している。完形土器とは異なり、埋め戻し時の混入の可能性もあるが、意図的な埋納を首肯しても良い遺物群ではある。出土状況の正確な把握が強く望まれる。

最後に陶器MT15～TK209型式の事例としては2個体の須恵器杯蓋を反転させた状態で柱穴底部に埋納した陶器・大庭寺遺跡(NO. 18)例や須恵器杯蓋を柱穴中央部に反転させ埋納している御所市南郷遺跡(NO. 25)例がある。それらの多くは、柱材の抜き取り後の埋納である。事例の多くについては、一覧表に譲りたい。

以上が、諸事例の概観であるが、提示できた資料の絶対数が僅か39例であり、これらの特殊例を一般化して、古墳時代の柱穴内埋納を総括することはできない。現状での資料的限界を認識しつつ、柱穴内埋納についての私見を次に提示しておきたい。

3. 埋納の傾向と検討課題の提示

土器の埋納行為自体は、縄文時代の埋甕や山之内遺跡例のように弥生時代前期の事例も知られており、古墳時代に定着した行為ではないことは明白である。また、古墳時代前期に比定できる竪穴式住居跡の主柱穴からも土器を埋納する事例が見られることから、後述するように掘立柱建物が集落の主な居住施設として多用される以前から、土器を柱穴内に埋納する

行為が存在したことを示している。一方、土器の柱穴埋納は、古墳時代中期以降に増加する傾向が、一覧表において把握できたが、古墳時代前期の確実な事例が、既に散見できることから、古墳時代中期を柱穴内埋納の初源期に規定することはできない。

一般的に掘立柱建物は、弥生時代から古墳時代において、増加傾向にあることが、宮本長二郎^(注2)によって確認されている。また、縄文時代や弥生時代の掘立柱建物は、集落内の共用施設である場合が多く、居住を目途とした例は僅かである。しかし、古墳時代中期には、首長及び地域有力者を中心とした集落に掘立柱建物が居住目的で多用されはじめ、前代の用途と大きく変化することが把握されている。このように古墳時代中期以降、土器を柱穴内に埋納する事例が増加する最大の要因は、居住目的の掘立柱建物が主体となる集落が、各地で増加することと密接な関連がある。

この点については、具体的な調査成果によって確認しておきたい。京都府南山城地域は、全長180mの前方後円墳である久津川車塚古墳や全長110mの芭蕉塚古墳が、古墳時代中期後半に築造される地域である。また、久津川一帯を中心に多くの古墳が築造された地域でもある。一方、集落では、確認された遺跡の大半が、竪穴式住居を主体とする集落であり、掘立柱建物を主体とする集落の確認は皆無である。しかし、精華町森垣外遺跡^(注3)では、一辺46mの方形区画溝内に柵を巡らせ、掘立柱建物が主体となって集落を形成することが判明しつつある。また、遺跡地内のほぼ全域において掘立柱建物跡を検出しており、古墳時代中期から後期に比定できる先進的集落であることが判明している。具体的には朝鮮半島との関連をうかがわせる大壁住居跡の検出や陶質土器の出土、鉄滓や焼土坑の検出による鍛冶の存在、紀伊地域からもたらされた滑石原石及び石製模造品の出土、馬歯の出土や紀淡海峡付近からもたらされた製塩土器の出土、陶邑古窯址群産の須恵器の多量出土、琥珀の出土など、当該地域では類を見ない集落址であることが確認できた。

この森垣外遺跡では、先述したように陶邑編年TK216型式に比定できる須恵器甕と土師器高杯を倒置した状態で埋納したP653(NO. 32)などが存在しており、柱穴内埋納の事例が8例を数える。この事実についても集落を構成した主要施設として掘立柱建物が機能していたことと深い関連が想定できる。竪穴式住居の主柱穴に土器を埋納する潜在的な観念及び理念が、棟構造をもった掘立柱建物の一般化に伴って拡散した過程を想定することができる。また、竪穴式住居跡に比べて、建て替えの回数が多いために、柱穴内への埋納行為が、必然的に増加したと考えたい。

なお、建設時の埋納例よりも廃絶時の事例が大半を占める傾向が指摘できるが、柱材の抜き取り時に、建設時の埋納関連遺物が攪乱された可能性もあり、一概にこの傾向を歴史的に評価すべきではない。しかし、埋納行為の基層理念を検討する上で何らかの参考になる傾向

ではある。

4. まとめ

古墳時代の集落を構成する居宅形態には、竪穴式住居と掘立柱建物が一般的に知られている。竪穴式住居は、伝統的に日本列島で多用された居宅形態であり、連綿と歴史時代まで採用される。他方、掘立柱建物は、縄文時代や弥生時代にも存在するが、集落内の共用施設である場合が多く、掘立柱建物が主体となって集落を構成する事例は、畿内中枢域及び周辺域においては、古墳時代中期以降である。しかし、当該時期の大半の集落では、竪穴式住居が依然と主流を占めており、掘立柱建物が主流をなす集落は僅かである。

近年、古墳時代中期から後期の先進的集落の調査が増加し、集落構造や集落自体の属性を考える上で、一定の遺跡数になりつつある。本稿の主題でもある柱穴内の土器埋納についても、古墳時代中期の先進的集落を中心に広がりを見せる可能性を推測しておきたい。

最後に、本稿の主題ではないが、律令期の地鎮についてふれておきたい。当該時期初段階の地鎮遺構は、都城や寺院、官衙などで主に確認されている。その背景にある理念には、仏教思想や陰陽道、神道などが想定できるが、検出される遺構の形態や遺物の構成には、漠然とした共通性はあっても、定型化が見られない。おそらく、古墳時代以降の柱穴内の埋納行為が継承され、新しい思想や理念を背景にして、徐々に、儀礼化されたためと考えられる。地鎮に関わる行為は、頻繁に執行されたと考えられる。が、一定した儀式として定着しなかった最大の要因は、古墳時代以降の潜在的理念が、律令期の地鎮の理念的基層をなしていたからではないだろうか。

本稿はあくまで事例の集成を行ったに過ぎない。今後、事例が増加すれば、再考することを明言し、拙稿のおわりとしたい。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係主任調査員)

注1 森 郁夫「地を鎮めるまつり」(『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報 第57冊 奈良国立文化財研究所) 1998

注2 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』(中央公論美術出版) 1996

注3 小池 寛・中村周平「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

小池 寛・松尾史子「森垣外遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

第1表 柱穴埋納一覧表(1)

NO	遺跡名称	所在地	遺構番号	柱穴番号	土器形式	出土遺物	埋納行為	文献
1	玉津田中	神戸市西区	竪穴住居04	SP120	庄内～布留	甕.高杯等数個 体	廃絶後	1
2	白水3次	神戸市西区	不明	SP03	古墳中期	土師甕、逆置	廃絶後	2
3	宅原	神戸市北区	不明	pit8	TK209～	柱.須鉢.掘.須 杯2.土高杯	建設時. 廃絶後	3
4	生田	神戸市中央 区	掘立建物2	柱穴	古墳後期初	滑石紡錘車.有 孔円板.白玉	建設時	4
5	東石ヶ谷	神戸市舞子	竪穴住居06	柱穴	弥生後期	弥生鉢.壺	廃絶時	5
6	神楽	神戸市長田 区	不明	P38	TK47～MT15	製塩土器(混入 か?)	不明	6
7	〃	〃	不明	P41	TK47～MT15	製塩土器(混入 か?)	不明	
8	〃	〃	不明	P42	TK47～MT15	製塩土器(混入 か?)	不明	
9	〃	〃	不明	P44	TK47～MT15	製塩土器(混入 か?)	不明	
10	蛸池東	豊中市蛸池 中町	掘立建物1	P28	TK216～208	土師甕2.壺1	廃絶後	7
11	〃	〃	掘立建物2	P3	TK216～208	土師高杯.杯部	建設時	
12	〃	〃	掘立建物3	P19	TK216～208	土師高杯.杯部	不明	
13	池島.福万 寺	大阪市城東 区	竪穴住居4	主柱穴	TK23～47	口縁欠損.須恵 壺1	廃絶後	8
14	〃	〃	掘立建物8	柱穴	MT15	須恵杯	廃絶後	
15	〃	〃	掘立建物4	柱穴12	MT15～TK10	杯蓋4点	廃絶時	
16	〃	〃	掘立建物4	柱穴13	MT15～TK10	土師小壺1、正 置	廃絶時	
17	陶邑.大庭 寺	堺市小代	掘立建物66- 0B	66-0P	TK47	ベンガラ遺存、 須恵杯	廃絶時	9
18	〃	〃	不明	385-0P	TK10	須恵杯蓋2、逆 置	不明	
19	長原.瓜破	大阪市平野 区	掘立建物701	SP03	TK23～47	須恵杯蓋、逆置	廃絶時	10
20	長原西地区	大阪市平野 区	掘立建物31	柱穴	TK23～47	土師壺	廃絶後	11
21	長原	大阪市平野 区	不明	SP6001	TK23～10	馬歯	建設時?	12
22	山之内	大阪市住吉 区	不明	埋納坑5	弥生前期	弥生鉢.甕	建設時	13
23	南郷	御所市南郷	掘立建物	SP651	古墳中期	土師壺、倒置	廃絶後	14
24	〃	〃	掘立建物	SP236	古墳中期	土師杯	廃絶後	
25	〃	〃	掘立建物	SP260	MT15	須恵杯蓋、逆置	廃絶後	
26	谷5次	桜井市阿部	不明	P78	弥生後期	弥生鉢	廃絶後	15
27	鳴神	和歌山市鳴 神	竪穴住居5	柱穴	TK47	土師鉢	廃絶後	16
28	大塚	長浜市西上 坂町	不明	P-00470	TK43	須恵杯蓋、逆置	廃絶後	17
29	〃	〃	不明	P-00484	～布留	土師二重口縁 壺.逆置	廃絶後	
30	〃	〃	不明	P-00570	～布留	土師小型丸底土 器	建設時	

第2表 柱穴埋納一覧表(2)

31	上人ヶ平	木津町市坂	掘立建物106	P四ハ	布留	合口の土師小壺	廃絶後	18
32	森垣外-2	精華町南稲八妻	掘立建物	P653	TK216	倒置須恵礫上に土師高杯倒置	廃絶後	19
33	〃	〃	掘立建物	P58	古墳後期初	土師甕、逆置	廃絶後	
34	〃	〃	掘立建物	P155	古墳後期初	土師壺、逆置、掘形	建設時	
35	森垣外-3	精華町南稲八妻	掘立建物	SP828	古墳中期末	土師甕、倒置	廃絶後	20
36	〃	〃	掘立建物	SP939	古墳中期末	土師甕、倒置	廃絶後	
37	〃	〃	掘立建物	SP943	TK43	須恵杯蓋、土師壺、正置	廃絶後	
38	〃	〃	掘立建物	SP104	TK216	柱・須杯、掘・須杯多数	建設時・廃絶後	
39	〃	〃	掘立建物	SP188	古墳中期末	土師高杯杯部に土師高杯	廃絶後	

表文献

1. 淡神文化財協会『玉津田中遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺構編』1992
2. 神戸市教育委員会「16. 白水遺跡第3次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』1997
3. 神戸市教育委員会「28. 宅原遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』1990
4. 神戸市教育委員会『生田遺跡現地説明会資料』1988
5. 神戸市教育委員会『舞子・東石ヶ谷遺跡Ⅱ』1990
6. 神戸市教育委員会『神楽遺跡発掘調査報告書』1981
7. (財)大阪文化財センター『宮の前遺跡・蛭池東遺跡 蛭池遺跡・蛭池西遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』1994
8. (財)大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅡ』1995
9. (財)大阪府埋蔵文化財協会「陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第50輯』1990
10. (財)大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』1994
11. (財)大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ』1992
12. (財)大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』1999
13. (財)大阪市文化財協会『山之内遺跡発掘調査報告』1998
14. 奈良県立橿原考古学研究所「南郷遺跡群Ⅱ」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第73冊』1999
15. (財)桜井市文化財協会「谷遺跡第5次調査」『桜井市内埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書』1994
16. (財)和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅳ遺跡第6次発掘調査概報』1995
17. 滋賀県長浜市教育委員会「大塚遺跡Ⅱ」『長浜市埋蔵文化財調査資料第14集』1996
18. (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「上人ヶ平遺跡」『京都府遺跡調査報告書第15冊』1991
19. (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「森垣外遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報 第86冊』1999
20. (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「森垣外遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報 第91冊』2000